

No.4

vol.1 no.4  
1997.3.8 発行JMA  
JAPAN  
MUSEUM  
MANAGEMENT  
ACADEMY

日本ミュージアム・マネージメント学会

会報

## 日本ミュージアム・マネージメント学会第2回大会に寄せて

日本ミュージアム・マネージメント学会副会長

江ノ島水族館館長 堀 由紀子

今日ほど一般の人々が博物館に対して関心を寄せる時代はかつてなかったのではないかと思います。物から心へと時代の求める精神が培われつつある中で、博物館に対する熱い思いや期待が寄せられてきていることを感じます。政治・経済はもとより、文化の視点も21世紀という折り返し点を目前に、何かをしなければ、変えてゆかなければという社会的な機運がそこには大きく作用しております。生涯学習時代を迎え、今日博物館が一人ひとりの知的創造の喜びや、心に何かを蓄える場として着実に大きな柱となって来ております。

さて、本年1月、全国科学博物館協議会の欧州博物館研修に参加し、久々に英・仏・独の博物館の業態を視察して参りました。展示展開の圧倒されるほどのボリューム感、社会に根づいた教育普及のあり方、多大に観光振興に役立てられているなど、多面的な役割がうかがわれました。一方、長引く経済不況の中で、どの国の博物館も財政的な自立性の追求は真剣であり、また、情報化時代へのダイナミックな展示の更新など、伝統に甘んずることなく、変革への模索を着実に進めております。時代はグローバルに進展していることが確認できました。

このような中で、日本ミュージアム・マネージメント学会の第2回大会が開催されることは、一步踏み込んだ創造的な革新への挑戦であると期待いたしております。研究領域は広く深くあり、この1年間の各研究部会の活動も活発に行われて参りました。今後とも、日本ミュージアム・マネージメント学会が、利用者と結ばれた新たな展開であり、ハードとソフトの両面の理論と実践の幅広い交流の場として躍進することを願っております。学会への多くの方々の参加を期待いたしております。



## C・O・N・T・E・N・T・S

|                                                                  |    |
|------------------------------------------------------------------|----|
| ■日本ミュージアム・マネージメント学会第2回大会に寄せて／日本ミュージアム・マネージメント学会副会長 江ノ島水族館館長・堀由紀子 | 1  |
| ■ミュージアム文化研究部会／幹事・伊藤美香                                            | 2  |
| ■制度問題研究部会／部会長・島津晴久 幹事・小川義和                                       | 4  |
| ■理論構築研究部会／幹事・塚原正彦                                                | 5  |
| ■事業戦略研究部会／幹事・斎藤恵理                                                | 6  |
| ■ソフトサービス研究部会／幹事・有田洋一                                             | 7  |
| ■投稿ご自由 侃々諤々／書評                                                   | 9  |
| ■会員からのメッセージ                                                      | 14 |
| ■INFORMATION ■編集後記                                               | 16 |

## ミュージアム文化研究部会

## 第4回 研究部会報告

|          |                     |     |
|----------|---------------------|-----|
| 1月11日(土) | 近江八幡市立<br>かわらミュージアム | 34名 |
| 1月12日(日) | 滋賀県立琵琶湖博物館          | 44名 |

第4回ミュージアム文化研究部会は、当面の研究課題である、①地域の伝統の継承、自然の保全、文化の創造といった地域的な課題に対する博物館の関わり、②地域全体を博物館化していくための多様な資源の統合化などについてのケース・スタディを深めるため、特色ある活動を展開している琵琶湖博物館、かわらミュージアムにて開催した。当学会初の関西方面での開催であったが、関東方面から約30名、関西から約15名と、大勢の参加があった。

## ●近江八幡市立かわらミュージアム

## 1. ミュージアムの背景

近江八幡は城下町として、また近江商人のまちとして繁栄・発展し、周辺は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。「八幡瓦」の工場跡に建設された「かわらミュージアム」は、瓦屋根の町並みや八幡堀などの周囲の景観に自然に溶け込んだ建築となっており、建物自体が展示と言ってもよい。周辺には、有形重要文化財である旧西川邸や郷土資料館などが点在しており、それらが市のハートランド推進室を中心とした市民の手でネットワーク化されている。まちづくりの原点から市民が自主的・自発的に取り組んできたというだけあって、ミュージアム・まち・市民がひと



つとなってまた新しい形態の文化を創り上げている。静かな自信と意欲がその落ち着いた風情のあるたたずまいから感じられる。

## 2. ミュージアムの特長

かわらミュージアムの特長のひとつとして、館長は、素材に重点を置いていることを挙げられた。昔の建築物の良さを取り入れ、岩石・木材・土などを利用し、館に葺かれた八幡瓦も周囲の修景に自然に溶け込むように、一枚一枚色むらをつけたということである。ミュージアムとまちとの調和を目指す意気込みが、この心配りからも伝わってくる。

常設展示室では、近江八幡の歴史・風土、八幡堀と八幡瓦の伝統及び伝建地区の魅力を紹介する空間をメインとして、さらに視野を広げて日本及び世界各地の瓦・瓦屋根の連なる町並み景観の多様性などを実物や写真などで紹介している。瓦という伝統的な素材と映像・音響など最新の技術とがマッチし、不思議な雰囲気醸し出す。ミュージアム周辺の旧西川邸などの昔の町並みが新しいミュージアムと一体的に保存・整備されている。まさにまち全体がミュージアムと言ってよい。

## 3. 今後の展望

ミュージアム建設の基本となったハートランド構想は、市民運動によって盛り上がったものであり、現在でも、ミュージアムを含めたまちづくりに市民が参加している。その熱心さが時に問題を生むこともあるが、うまくかみ合い、協力し合って活動を進めているとのことであった。「先人の残してくれた文化遺産をどのように次世代に継承していくかが課題」であり、「自分たちが誇れる、自分たちが主役のまちにしていきたい」と三崎氏は語る。

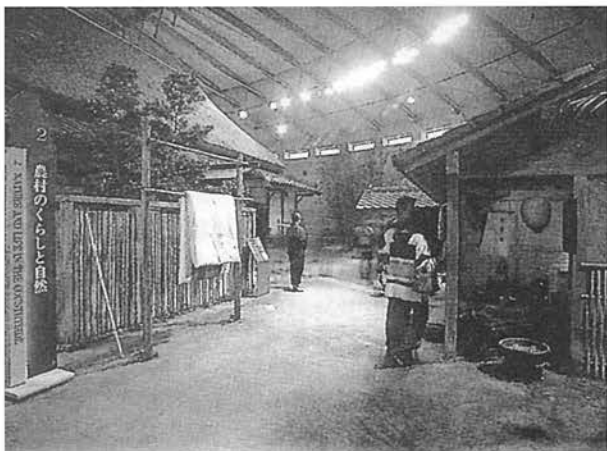
かわらミュージアムはまだ未完成の状態である。これからは「瓦」を核にしてさらに発展し、生活やまち、世界にまで視野を広げ、市民が中心になりながら、まちやミュージアム、文化を創ってほしい。同時に「瓦のメトロポリタン」として一層発展するよう期待される。

## ●滋賀県立琵琶湖博物館

当部会では、準備室の段階より事例紹介と協議を行ってきたが、今回、一般公開2ヶ月目の館を実施に視察し、協議を行った。

## 1. 博物館の設置と基本理念

琵琶湖の南湖畔、烏丸半島に、1996年10月20日、滋賀県立琵琶湖博物館はオープンした。広々とした湖を借景として利用し、「湖と人間」というテーマをもった湖の総合博物館である。



琵琶湖に博物館建設の話が持ち上がったのは、昭和50年代である。昭和30年代までは、そのまま飲水としても使用されてきた琵琶湖で、昭和44年、多量の植物プランクトンによる悪臭が問題となり、昭和52年には淡水赤潮が発生する。その頃から、県民の琵琶湖の環境に対する意識が出始め、「琵琶湖のことを知りたい」という要求に応えられる機関の設立が望まれてきた。昭和62年に、博物館の基本構想として具体化し、整備が進められ、1996年10月に一般公開となった。

琵琶湖の多面的な価値を改めて解明し、人間の生活との関わり方を歴史的に考え、これからのわたしたちの湖とのつき合い方、すなわち新しい時代にふさわしい湖と人との共存関係を探り、新しい文化の創造を模索していくことは、最も重要な課題と考えている。琵琶湖博物館は、湖と人との関係を過去にさかのぼって研究調査し、資料を収集・整理し、その成果をもとに県民とともに考え、今後の望ましい在り方を探るための組織として存在する。これは研究施設であり、文化施設であり、生涯学習施設であって、交流と情報のセンターとしてもまた機能するものである。

「テーマをもった博物館」「フィールドへの誘いとなる博物館」「交流の場としての博物館」という3つの基本理念を柱に、館と来館者にとって双方向の出会いの場となることを目指している。

## 2. 博物館の状況

以上のような、専門学芸員・嘉田氏の説明の後、館内を見学した。まず驚かされたのが、来館者の多さである（平成8年中の入館者は26万6千人、一日平均4千400人とのことである）。

展示室は、A：琵琶湖のおいたち、B：人と琵琶湖の歴史、C：湖の環境と人びとの暮らし・水族展示、屋外展示からなり、その他にも五感を使って体験学習するディスカバリールームなどがある。展示にもよく工夫が凝らされ、学芸員の方々の心意気が強く伝わってくる。大人も子供も、「身近なもの」と捉えて実際に参加体験しながら楽しんでいる様子が見えがえる。特に印象的であったのはC展示室である。昭和30年代の生活を実在の人々とシチュエーションで具体的に再現し

ている。布団やタオル、ノートなど身近な日用品に書かれた解説は、単に「パネルを減らし、実物を置く」という単純な考えを越えて、自然な気持ちで理解を深めたいということの工夫のように思える。

また、琵琶湖というテーマに基づいて、歴史・自然・文化・技術など様々な要素が入っており、例えば「生物・物理・化学」というような人為的なジャンルにとらわれていない点も良いのではないかと感じた。今後、切り口を変えていくことにより、これからもいつそうユニークな活動ができる可能性を秘めているように思った。どこを見ても盛り沢山で、それ故に、「もう少し想像の余地を残しておいても良いのでは」という意見も聞こえたが、全体的に「顔の見える展示」になっていたのではないかなと思う。

## 3. 運営についての参加者のコメント

オープン後の運営的諸課題と参加者のコメントを挙げる。

- ・シール方式の入館券について、改善してはどうか。
- ・展示物の修理について、「壊れるのは仕方がない」との気持ちで対応することが必要である。
- ・フィールドサポーター、インストラクター（30名）の運営専門の職員が必要になってくる。
- ・学芸員の多芸性の評価システムをどう作るのが課題である。
- ・県内・隣接県からの来館者がほとんどなので、リピーターとなる工夫が必要かもしれない。

琵琶湖博物館はこれからである。生まれだての博物館が本当の意味で「生きた博物館」になれるかは、全てこれからの活動にかかっている。実際に運営を始めてみて、様々な問題が出てくるであろうが、そこは柔軟に対応し、「変わり続ける、成長し続ける博物館」であって欲しい。また、基本理念にもあるように、「目の前にある琵琶湖」、地域というフィールドへの誘いになれるよう、人々が各々何らかの形で次につなげることができるような場であってほしいと思う。

当部会でも引き続き検討を重ねていきたい。

初のツアー形態をとった部会であったが、参加者同士が交流を深めることもできて、非常に良かったのではないかなと思う。ただ、両日とも時間の関係上、十分な協議を行えなかったことが心残りであった。第2回大会において熱い討論を期待したい。

（幹事：伊藤美香/(株)ダイヤ・ピーアール）

## 制度問題研究部会

## 第3回研究部会報告

第3回制度問題研究部会は、22名が参加し下記の通り開催された。

日時：平成9年1月25日（土）午後2時～5時

会場：国立科学博物館 大会議室

前回の研究部会ではアメリカの博物館制度の現状について山本珠美氏（東京大学大学院教育学研究科）から話題提供があり、アメリカの博物館制度、博物館事情について知識を深めることができた。本研究部会としては、引き続き海外の博物館制度について考察を行い、日本の博物館制度について検討を加えることとなった。

第3回研究部会では、イギリスにおける博物館の制度等に詳しい竹内有理氏に話題提供をお願いした。「イギリスの博物館制度と人材養成について」というテーマで以下のような話があった。

## 1. 博物館の設置主体について

イギリスの博物館は設置主体の面から大きく四つの分類される。国立[59]、自治体所管[800]、インディペンデント[1300]、大学博物館[300]である（[]内は、設置数）。インディペンデントミュージアムの約7割は1970年以降に設置されたもので、日本の私立博物館とは異なり、何らかの形で自治体や国の援助を受けているものが多い。いわゆるNPOの範疇に入るものである。

## 2. 博物館を支える組織について

博物館を支援する組織として国の公的機関である博物館美術館審議会（MGC）、地区博物館協議会（AMC）、国民文化遺産記念基金、科学技術保存基金（PRISM）、民間の支援組織である博物館協会（MA）、国民美術品基金等がある。MGCは博物館の水準を向上させることを主たる目的とし、博物館に対し助言と経済的な支援を行っている。また博物館登録制度を設けている。AMCは国立以外の地方の博物館に対し援助を行っている。

## 3. 博物館登録制度等について

MGCは専門性の高い委員によって構成され、博物館の水準を向上させるために登録制度を設けている。登録の要件としては、博物館の組織構造、財務、学芸管理、コレクションの収集、保存、処分に関する方針等についてである。登録された博物館にはさまざまなメリットがある。MGCの基準をクリアした館であると一般の人々に認められ、MGCやAMCの援助を受けることができるといった具合である。またMAは、博物館職員のための職務倫理規定を定めている。さらに各博物館はチャリティー団体への登録によりさまざまな税制上の優遇措置が受けられ、これらはAMCの資金援助を受ける際の条件にもなっている。

## 4. 人材養成について

博物館協会認定資格としてMuseum Associationがある。その資格取得のため、Museum Association Diplomaのコースを設けている。この資格は博物館職員の絶対的な条件ではなく望ましい程度のものであるが、博物館職員に応募する際には有利な条件であること間違いない。また国民装飾芸術協会はボランティアを養成し、博物館に派遣している。学芸員専門性を高めるためにマンチェスター大学やレスター大学では博物館学のコースが大学院に設定されており、博物館学を終了したものには、Museum Association Diplomaの試験の一部を免除する制度もある。

## ◆博物館を支える支援機関◆

|      | 公共セクター                                                | 民間セクター                       |
|------|-------------------------------------------------------|------------------------------|
| 資金援助 | 博物館美術館審議会<br>地区博物館協議会<br>Acceptance in Lieu<br>政府補償制度 |                              |
| 資料   | 国民文化遺産記念基金<br>V&Aコレクション購入基金<br>科学技術保存基金<br>博物館資料記録協会  | 国民美術品基金                      |
| 理念   | MGC登録制度                                               | 博物館協会倫理規定                    |
| 人材養成 | 博物館研修協会                                               | 博物館協会認定資格<br>国民装飾芸術協会<br>各大学 |

竹内有理・日本ミュージアム・マネージメント学会  
制度問題研究部会報告資料（1997）より

このようにイギリスの博物館の制度と人材養成について体系的に紹介していただき、短い時間であったが大枠を把握できた。

研究部会の後半は、質疑応答の形をとりながら参加者の意見や感想を述べてもらった。資金援助、博物館を支える組織に携わる人の資質、学芸員のレベルの向上、大学における博物館学の実状などについて意見が出された。竹内氏の指摘にあるように、イギリスでは博物館を支える組織に関わる人々が専門家集団として博物館を支援し援助するといった基盤があり、今後日本の博物館制度（行政）を考える上で解決しなければならない問題となるであろう。

本研究部会としては、わが国における博物館制度の諸問題について実状をふまえながら具体的に検討をしていくことが確認された。

（部会長：島津晴久/（財）千葉県社会教育施設管理財団、  
幹事：小川義和/国立科学博物館）



## 理論構築研究部会

## ミュージアム・マーケティング

○12月14日(土)の理論構築部会では、西友文化事業部の土井利彦氏の基調報告後、ミュージアム・マーケティングの在り方について研究協議を行った。

土井氏の報告は、経済学、社会学などを学際的に駆使して「ミュージアム・マーケティングとは何か」という原理的考察を試みた提案であった。

報告の趣旨を簡単にまとめると次のようなものになる。

マーケティングという話題になると、人々のニーズにどうこたえるかという話題になってしまう。そうすると、「組織はどうあるべきで、何を目指すのか」という基本理念が見失われてしまい、マーケティングを実践した結果、組織自体が死んでしまうという皮肉な結果が起こってしまう。その例を紹介しよう。

アメリカのある病院で、市場調査を行ったら、人々のニーズは「健康を維持することにある」という調査結果を得ることができた。そこでこの病院は、「高血圧を防ぐ食生活」などの健康を維持するための数々の教育プログラムを開講した。ところが、講座に参加する人はほとんどいなかった。せっかくの大規模な市場調査をして、実施したのにどうしてだろうか？多くの人にとって「病院は病気を直す」ところで、健康な人は行かないところである。その基本原則を見失ったマーケティングだったからである。

このようなことからわかるように、ミュージアムマーケティングを行う場合、つねに「ミュージアムとは何か」という視点を見失ってはならない。

ところが、「ミュージアムとは何か」という基本問題になると、博物館法やICOMの規定を持ち出したり、よい企画や展示をすれば人は集まるといふ信念の吐露に終始するというところに陥りやすい。

ここに大きな誤解がある。市場原理はいかなる地域にも見られ、それを無視すると旧ソ連や北朝鮮のように、国家運営にも支障を来し、ついには破綻に行きつくことになる。ただし、ここでいう市場原理はいわゆる資本主義における市場ではない。土井氏によれば、たしかにいま資本主義の市場原理が地球を覆い、グローバルキャピタリズムを形成しているが、ここでは、環境問題のように、市場の失敗が見られるからだという。とりあえずここでは、貨幣取引を超えた市場原理だと考えてほしいということだ。

つまり、「ミュージアムとは何か」を決めるのは、権威でも権力でもない。広い意味での市場の力、すなわち、人々の意識なのである。その意味において、ミュージアムにとってもマーケティングが重要な役割を果たすことになる。

さてそれでは、文化状況を含めた広い意味での日本の市場はどのように変化してきたのだろうか。日本が物的欠乏から脱し、豊かな社会としての徴を帯びるよ

うになったのは、1975年であった。このころをターニングポイントとして日本では有り余るモノをいかに売るかというマーケティング手法が顕著になってきた。モノは、機能ではなくデザインや見かけの新奇性を付加し、他者との差異を強調することが当然となってきた。差異による新たな欲望刺激であった。このようなマーケティングの内には、バブル経済への要素が多分に含まれていた。そして、モノとカネによってしか自己表現できないホモ・エコノミカを大量発生させて、1990年のバブル破綻を招いたのである。

いまや環境問題をはじめ新たな地球の状況は、日本に新たな成熟社会の実現を迫っている。物的な生産—消費中心の経済・社会構造から、非物質的な生産—消費、つまりゲームソフト、芸術、エンターテインメントといった文化の生産—消費中心の経済・社会構造への転換である。このような経済・社会構造の動向の中で、ミュージアムも自らが、人々が喜んで消費するような「新たな文化生産」を行うという使命が求められているという。

土井氏は、ここでミュージアム・マーケティングとして二つの取り組みが必要だと指摘している。一つは、現在のミュージアム活動を活性化するためのミュージアム・マーケティングであり、その内容は企業の行うマーケティングに準じた、戦術的なもので、そのhow toは多くの著作などで示されている。いま一つは成熟社会を形成の戦略の一環としてのミュージアム・マーケティングである。キャンパスミュージアム構想やミュージアムシティー構想といった新たな文化市場の創造に結びつくものであり、いわばミュージアムを成熟社会の文化の中核とするための理論的かつ実践的な取り組みだという。

土井氏の基調報告の後、各参加者からマーケティングの戦略手法や集客作戦、アンケートの手法など戦術論に関する議論が行われた。そこで提起された問題から、いま改めてミュージアム・マーケティングを含むミュージアム・マネジメントの戦略論・戦術論を明確にした理論化の必要性が確認された。

当部会では、参加者からだされた議論をいかし、今後とも「ミュージアムとは何か」という基本的視点を押さえつつ、それとともに、学際的視点から関連領域の成功・失敗に学びながら、実践にいかすことのできるミュージアム・マネジメントの理論構築を進めていくこととする。

(幹事：塚原正彦/国立科学博物館)

## 事業戦略研究部会

今回で、3回目を数える事業戦略部会は、12月7日、恵比寿・ガーデン・プレイスの「恵比寿麦酒記念館」を視察訪問した。“ビール効果”も手伝ってくれたのか、21名もの参加者を得ることができた。

視察のおおまかな行程は、はじめ会議室で施設の概要を説明して頂き、その後、自由行動で館内を観覧、そして再び会議室に集まり、質問形式で、事業の実態を調査させて頂く、という流れであった。

## ◇ 施設の概要

恵比寿ガーデン・プレイスは、1世紀以上もの間エビスビールを造り続けてきたビール工場の跡地、約8万3千㎡を利用した、山手線の内側では最大規模の開発で、全国的な注目を集めた。物販、宿泊、住居、そして文化施設を備えた都市開発で、サッポロビールとしては、はじめてのディベロッパー的試みであったという。都会の一等地にあつてオープンスペース60%、しかも緑をふんだんに配した贅沢な都市空間は、まさに都会のオアシスといった感じである。これまで3千4百万人もの集客があり、しばしば東京ディズニーランドと比較されるとのことである。

「恵比寿麦酒記念館」は、こうした絶大なる集客力を誇るガーデンプレイス内にあつて、開館より130万人以上、年間約50万人という、計画当初予定していた15万という数字をはるかに上回る利用者数となっている。

料金は無料で、ほとんどのルートにも組み込まれており、土日ともなればファミリー、カップルなど、平日の3倍もの人で賑わう。展示では、ビールの歴史、ビールの製造工程などを、実物や映像、検索装置等で分かりやすく紹介している。なかでも、バーチャルリアリティの技術を導入し、ミクロの世界へ誘い、ビールができるまでのプロセスを体験させてくれる「バーチャルブラウアリー」は、展示の目玉となっていて、人気を集めている。

## ◇ 「恵比寿麦酒記念館」の事業活動に学ぶ

## ちょっとした工夫で話題づくり

「恵比寿麦酒記念館」では、限られた予算のなかで、スタッフが知恵を絞り、果敢に事業に取り組んでいる、といった姿が印象的であった。たとえば、本施設のシンボルともなっている銅釜の周囲は、イベントスペースとなっているが、ここには、1920年独製の、演奏用ピアノとして世界的に評価の高い「スタンウェイ」を置き、プロ・アマを問わず、公募して自由に演奏できるようにしている。このピアノは、サッポロビールの前身である大日本麦酒が所有していたもので、東京空襲を奇蹟的に逃れた日く付きのピアノである。

演奏会が開催されるときは、たくさんの利用者が広場に集まり、ちょっとしたコンサート会場と化す。演

奏者が友人やファミリーを連れてきてくれるので、普段なら足を運んでくれないような客層にも、施設を知ってもらえる良い機会となっている。今ではすっかり定着し、全国から応募があるそうだ。一台のピアノが、たくさんの人々に喜ばれる機会を提供し、同時にミュージアムの話題づくりにもつながっている。しかも予算的には小さな配分で済む。まさに理想的な展開といえよう。

## 都市のライフスタイルを支援

ミュージアムが様々な都市の生活シーンのなかで活用されていく。そのためには、多少本業を離れたことでも、積極的に検討してみる。今後の事業戦略のなかでは大切な視点であると思う。この度の「恵比寿麦酒記念館」の視察で感じたことの一つである。

「ビールを飲めるミュージアム」というのが、本施設の魅力ある姿の一つだが、例えば、会社帰りのサラリーマンがたちより、新聞を読みながら一杯のビールを飲んで家路につく。ミュージアムの知的で落ちついた空間のなかで、一時の寛ぎを得る。このような場を、ミュージアムが積極的に提供してもよいのではないか。「恵比寿麦酒記念館」では、実際にこのような利用者があるとのことだが、都市の一機能として、ミュージアムが、展示や教育事業といった本業に加え、こうした副次的サービスで、都会のライフスタイルを支援する視点も重要である。そういえば、前回視察したNHK放送博物館でも、昼食時のOLやサラリーマンのための、テレビ放送サービスや、地域住民のためのカラオケサービスを行っていたことを思い出す。

## 地域との関わり

地域とのつながり、ということでは、「恵比寿麦酒記念館」の場合、企画展にその姿勢が現れている。

視察をした時は、「恵比寿の街角物語」というテーマのもとに、地元作家の作品を中心に、恵比寿の街の様々な表情を描いた絵の展示を行っていた。前回の企画展では、「ザ・ゑびす」ゑびす信仰とその歴史」というテーマであったそうである。このような、地域住民にとって、関わりが深く、興味も喚起しやすい、さらには、地域住民が企画展に参画する機会を作りやすい、といったテーマ設定は、地域住民が何度もここに足を運ぶ動機づけとなるとともに、地域の文化創造に大きく寄与できるものと考えられる。

この度の視察では、参加者全員が感想を述べ、質問をするといったスタイルをとった。皆さんそれぞれに目のつけどころが異なり、それらを共有することによって、大きな成果があったと思う。ここでは、そうした活発な質疑応答のなかから、いくつか感じたことを紹介させて頂いた。

(幹事：齊藤恵理/株式会社文化環境研究所)

## ソフトサービス研究部会

### 事例研究：ソフトサービスの現場見学

#### ～船の科学館・フローティング

#### パビリオン羊蹄丸を訪ねて

秋晴れの臨海副都心。参加者一同、羊蹄丸に集合した。船の科学館小堀氏にご案内いただき、パビリオン内を見学、引き続き船の科学館も含めて説明をいただいた。

大型船舶を利用した実船展示に加え、新しい発想で設計された、アミューズメント施設とミュージアムとを両立させた、アミュージアムとでもいうべき施設である。

#### 1. 船の科学館と羊蹄丸

臨海副都心、青海地区の一角、白い船の形をした船の科学館の目の前に、羊蹄丸は今にも出航しそうな雰囲気を含えながら碇をおろしている。羊蹄丸は、旧国鉄青函航路の連絡として活躍していた名船で、昭和63年3月13日に最後の航海を終えた後、船の科学館に移籍した。平成4年には「国際船と海の博覧会」ジェノバ博の日本政府のパビリオンとして出展され、平成8年3月、船の科学館の施設の一部として、船内改装（一部映像コーナーは継続使用）し、一般公開された。

#### 2. 羊蹄丸の展示内容

船内は、シー&シップワールド、青函ワールド、マジカルビジョンシアター、ブリッジ、エンジンルーム、サービス施設としてアドミラルホール、休憩コーナー、プロムナードショップ、オープンデッキ等のゾーンで構成されている。

入口を入るとそこはシー&シップワールドである。イタリアから日本までの海中をイメージして設計されているとこのことで、海中という非日常的な空間を通り抜ける導線で構成されている。海中という設定のため、少し暗いとの声もあったが、入館者の目を引き付けるような多彩な演出で、楽しめる導入部となっている。

青函ワールドは、最大の目玉となっているコーナーで、青函連絡船羊蹄丸ならではの構成となっている。青函連絡船のみが知っているような郷土色豊かな空間を、日本全体が高度成長期に向かって力強く走り始めた昭和30年代前半という時代に設定して演出している。舞台設定を、都会的な函館ではなくあえて土のにおいがする青森に設定し、決して豊かではなかったが、将来に希望をもって力強く生きた当時の人々の表情や仕草をリアルに表現してある。コーナー全体が今にも音をたてて動き出してしまうような、臨場感あふれる空間が演出してあった。





売店で並べられていた週刊誌・新聞なども当時の日付のものが並べられてあり、収集等の作業にあたられた関係者の方々のご苦労が垣間見える。

全て展示物は入館者が直接手に触れられるような展示をしている。盗難などについての質問もあったが、多少のトラブルは承知の上で、あえてこの展示方法に踏み切った、とのことであった。

マジカルビジョンシアターは、ジェノバ博の日本政府のパビリオンとして出展された当時の設備を引き続き使用している施設で、音声のみを日本語に吹き替えているとのことである。

多目的ホールとしてのアドミラルホールは結婚式場としても運営されており、最近の船上結婚式のブーム、また、臨海副都心の人気などもあり、利用者も増加しつつあるということだ。

プロムナードショップでは羊蹄丸のオリジナルグッズのほか、函館や青森の特産品や記念品も販売されている。

休憩コーナーの一角にはプロムナード・カフェが設けられており、軽食、飲み物等が販売されている。

### 3. 運営の現状

羊蹄丸は船の科学館（財団法人日本海事科学振興財団）の一部の独立した施設として、運営されている。売店、自販機コーナー、ゲームコーナーは直営方式で運営し、結婚式場、軽食等は業務委託方式で運営管理

を行っているとのことである。展示、映像コーナーは、コンパニオン4名（常時3名）で対応している。

臨海副都心での世界都市博覧会の開催計画に合わせ、羊蹄丸の設備、運営内容等を計画してきただけに、都市博の中止決定は、その後の運営上に大きな打撃を与えた。その結果として、人員の削減を含めた現状のような業務委託、少数のコンパニオンでの運営、営業体制で独立した運営を行っている。

このような状況下で、オープン時には土日曜日で6,000～8,000人、その後は土日曜日で2,000～3,000人位の入館者を迎えている。平成7年11月1日に開通された「ゆりかもめ」も、大きな集客要素となっている。

見学後、館側から橋爪常務理事、桜井部長代理、小堀部長代理の3氏から、特に前記の具体的内容をご説明いただき、立地条件等によってのご苦労の一端を実感できた。今後の部会の活動の参考にさせていただきたい。

最後に、臨海副都心の人気、お台場等の一般観光客の入館者の増加を考えると、船・海等の専門的な内容から、一般の人が理解できるような内容に徐々に変え、誰からも親しまれる施設にしていく必要があるとのこと、館側から今後の課題として出された。

今回の事例研究では、従来の博物館とは少し異なった施設と環境を見学した。また一つ新しい研究テーマを発見できたような気がしており、今後の部会の活動の一助になれば幸いである。

（幹事：有田洋一/（株）ダイヤ・ピーアール）



## 投稿ご自由

## 侃々諤々

皆さんで考えるコーナーです。ご意見をお寄せ下さい。

## ◆子供向け展示に対する一考察

杉垣靖子

## 1. はじめに

娘を連れて博物館を訪れる機会を持つようになって、今までとは異なった、子供にもわかりやすいかどうかという新たな視点を持つようになった。こうした視点に立った場合、大部分の館で十分な展示を行っているとはいいがたいのが現状である。また、親子で館を訪れる場合、親子の間に鑑賞の相乗効果が得られるということも言える。こうしたことから子供にもわかりやすい展示方法が今後の博物館の一つの方向性を示すと考えている。本論では子供にもわかりやすい展示方法について考察する。

## 2. 「こどものためのびじゅつかん」へのインタビュー

1995年12月に板橋区立美術館において館蔵品展＋ワークショップ「こどものためのびじゅつかん」が行われた。これは、子供達に美術館と美術に親しんでもらおうと企画されたものである。担当学芸員、松岡希代子氏によると子供達に親しみを感じてもらうため配慮した点は以下の4点である。

## ①「こども語」によるキャプション

作品タイトルを子供達にも容易に理解できるよう直した。例えば「龍虎図屏風」は「ドラゴンVS.タイガー」となる。また、作品の古さを説明するためにおばあさんとおじさんのイラストを作成し、それぞれ100年、50年を表した。

## ②ケース外展示

特別な機会として掛け軸と屏風の2ヶ所のケース外展示を試みた。作品の性質を生かして仮設の和室を作り、その室内に展示することでそれらの機能を体感できるようにした。

## ③実験コーナーの作成

鑑賞者が光の色や明るさを自由に変えて作品の変化を経験できるコーナーを作成した。

## ④ワークショップでの子供達の作品展示

美術を体感するためのプログラムとしてギャラリーツアーとワークショップを企画した。

①②④は効果があつたが、③は展示物から作り物へ

興味が移り、検討の余地がありそうだ。

## 3. 展示に対する子供の行動観察

特別に子供のための企画としたわけでない館における子供の反応を調べた。まず子供は大人と違っておもしろくないものには見向きもしないが、興味があれば長時間立ち止まったり色々と質問をするという行動現象を基にした。4才の娘を多数の美術館と一緒に連れていき、その反応を観察した。以下に代表的と思われる4館の例をあげてみる。

## ①電力館

東京電力が運営している企業博物館であるため、電気に関する情報の提供と、事業内容やその広がりを伝えることを主としている。全館を通して映像や人形劇、コンピューター、ゲームを用いて電気を説明するなど楽しく優しく親しみやすい展示を行っている。ゲームというのは、例えば2つの鉄のボールを回すことで電磁石の原理を説明するものや、自転車をこいで発電のしくみを説明するものである。この楽しい雰囲気の中で娘が興味を持ったことは、発電のしくみを知るための自転車こぎゲームと電化製品のみで構成された仮設のキッチンやバスルームであつた。

## ②船の科学館

海の施設の普及のため造られた海事総合博物館は本館、宗谷、羊蹄丸の3館よりなっていて、それぞれ異なった展示を行っている。

本館は、模型や実物を目で見ていくもので、ここでは娘は興味を示さなかった。

宗谷は、南極観測船宗谷を、実際に活躍していた時と同じ様子が展示してある。鑑賞者は本物の船に乗り南極観測船の内部を見ることができる。娘は本物の船に乗ることをとても喜び、デッキを走る時の自分の足音にびっくりしたり、船内を自由に楽しんでいた。

羊蹄丸は青函連絡船羊蹄丸の内部を改装した、海に浮かんだ船の催し物会場である。本館と違って堅苦しくない3つの展示室がある。1つ目は映像劇場ホール、2つ目は海中映像や音で海を体感させる部屋、ここには動くイルカの乗り物や水中スクーターもあり、小さな映像水族館と遊園地の混合空間のようである。3つ目は青函連絡船が活躍した昭和30年の青函連絡船にまつわる青森の町を実物大で再現している。娘が興味をもったのは、海を体感させる部屋での乗り物（海を体感する意味では水族館より劣っていた）と、青森の町の再現であつた。

## ③電車とバスの博物館

東急電鉄の電車とバスの歴史と現在の事業内容や広がりを知らせるために運営されている企業博物館であ

る。全館を通じて、昔の車両の展示は椅子に腰かけてもよかつたり、本物の運転席に座つての運転シミュレーターなどの展示物に触れて体感する機会が多く、娘はとても楽しく自由に館内を移動していた。また、展示案内等が床上1m以内で、子供の目の高さを考慮した位置にあり、内容が特別子供に理解しやすい表現になっているわけではないが娘は興味をもっていた。

#### ④目黒区美術館

公立の美術館である。当館には1.2m位の高さのガラス張り展示ケースがある。小学校3年生以下の子供には、展示物を上から見るのが難しそうである。が、当館ではケース前に40cm位の踏み台が置いてある。娘はよく見えるからといってどの展覧会にかかわらずよく鑑賞する。また、当館は毎年夏休みと春休みにワークショップを盛り込んだ展覧会を行っている。学校が休みで子供の来館が多いためか、この時期は展示案内も展示物も子供の目の高さにあわせて従来より低くなっている。この休みの時期の展覧会はどれも娘が興味を示し楽しんでいる。

### 4. 行動観察からの考察

子供にもわかりやすい展示のために3点をあげる。

#### ①展示物を子供にもよく見える位置に置く

4館のうち、電車とバスの博物館のみで子供の目の高さを意識した展示がなされており、子供の注目度も高かった。また、目黒区美術館においても展示が子供の目の高さに設置されていたり、もしくは踏み台等により展示物をよく見ることができるときに興味の示し方が高くなる。

#### ②実物展示に触れる機会を作る

実物に触れるという体験はとても楽しく、また、後まで印象に残るようである。例えば、船の科学館において本物の船に乗船したことや、電車とバスの博物館において本物の乗り物を運転するということは娘にとって一番楽しく印象に残ることであった。

#### ③生活に身近な物を媒介にして展示物に親しみをもたせる

展示物を解釈する上で、幼児は特に、子供の生活に身近な物を媒介に説明すると興味を持つようである。例えば電力館での、自転車こぎによって発電のしくみを説明するゲームや実物のキッチンやバスルームの展示である。自分も乗ったことのある自転車であつたり、家にあるキッチンやバスルームの風景が、とっかかりやすく親しみを持てたようである。

また、展示物の質が違うが、展示物を集めて一般の観覧に供する点で共通性があると思われる動物園で同じような経験があつたので以下で述べる。

埼玉県こども動物公園では、生活に身近な物を取り入れて動物への理解を増やそうと工夫しており、これ

に娘はとても興味をひかれ、動物に対して親しみが増していた。例えば、うさぎやりすの小動物の舎で、お弁当箱に彼らのえさを詰めて展示したり、コアラ舎の前に小ぶりの木登りできる木をおいてコアラと同じ姿勢をとらせるなどである。生活に身近なお弁当や木登りを媒介にすることで、子供は展示物（動物）への親しみが増し、印象に残るようである。

子供にもわかりやすい展示とはどのようなものか考えてきたが、本論はサンプルが一人であり確実性に乏しいため、再度サンプルを集めての調査を考えている。

(謝辞)

本研究を進めるにあたり、有益なご助言をいただいた板橋区立美術館の松岡希代子氏に深く感謝します。



## ◆私立博物館を育てるための制度を充実させてください

玄武洞ミュージアム 館長 田中 榮一

私立博物館の経営にとって財団法人にかかわる問題は大きな課題です。アメリカでは目的と仕組みが認められれば、基金よりまず先に財団法人が設立でき、これに賛同する個人の多くの寄付が集まって運営されていくと紹介されています。平成8年10月4日付け文部事務次官の通知は、公益法人は、わが国の経済社会において重要な役割を担うに至っており、今後ともその活動の適切な発展を図ることが重要であると記され、『公益法人に関する年次報告』を作成することを定めるなど充実が図られようとしておりますが、博物館の育成のために本当に財団法人という制度が十分に生かされているのであろうか。

私の博物館は、天然記念物玄武洞の所で玄武洞の成り立ちや歴史、玄武岩についての展示並びに世界の石の花・華である、宝石・鉱物の結晶・化石を集めた博物館です。昭和47年に新しく土地を取得して株式会社を設立し、山陰海岸国立公園の園地整備事業として食堂・売店を開設、併せて玄武洞の成り立ちや歴史、玄武岩についての展示を行う玄武洞資料館を併設、事業を広げ内容を充実させて、昨年博物館相当施設として認められたものです。

数年前の全国博物館長会議において、博物館の育成や援助の方策として、財団法人という制度を設けている。この制度を活かして博物館の充実を行うことがよい。という助言をいただき、登録博物館を目指して財団の設立に努力を続けて参り、いろいろな経過を経て、現在、財団法人の設立申請書案を作成し、提出する段階まで至りましたが、基本財産の完全無欠な実現が求められるため、なかなか難しく、勉強を進めていますので皆さんの意見をお聞かせください。

### 育成のための制度はつくられています

博物館育成のための財団法人税制特別措置の主なもの次ようになっています。

1. 所得税については、利息・配当・利益の分配・報酬と資産の贈与・遺贈等の非課税
2. 法人税については、非収益事業の非課税と収益事業の所得に関する税率軽減
3. 相続税・贈与税は公益事業に用いることが確実なものは非課税
4. 地方税の不動産取得税・固定資産税の非課税並びに非収益事業に対する非課税

公益法人の設立許可及び指導監督基準はこのようになっています

一般には、設立は税収の立場からできるだけ認めないようしようという基本的な考え方にたっているの

で、設立についての指導はしないことになっているようですが、新しい『公益法人の設立許可及び指導監督基準』の財務及び会計では、公益法人は、設立目的の達成などのため、健全な事業活動を継続するに必要な確固とした財政的基盤を有するとともに、適切な会計処理がなされなければならない。したがって、その財務及び会計については、以下の事項に適合させるように適切に処理しなければならない。

1. 原則として公益法人会計基準に従い、適切な会計処理を行うこと。
2. 財団法人にあつては、設立目的の達成に必要な事業活動を遂行するための会費収入及び財産の運用収入等があること。
3. 財団法人にあつては、設立目的の達成に必要な事業活動を遂行するための設立当初の寄付財産の運用収入及び恒常的な賛助金収入等があること。
4. 基本財産の管理運用は、寄付者が寄付する際にその管理運用方法を指定した場合を除き、固定資産としての常識的な運用益が得られ、又は利用価値が生ずる方法で行うこと。
5. 運用財産の管理運用は、当該法人の健全な運営に必要な資産[現金、建物等]を除き、元本が回収できる可能性が高くかつなるべく高い運用益が得られる方法で行うこと。
6. 公益法人が長期借入れ[返済期間が1年以上の借入れをいう]を行う場合にあつては、確実な返済計画を策定する等公益活動に支障をもたらすことのないよう十分留意するとともに、収支予算書に明記し、理事会及び総会の承認を得る等の措置をとるとともに、所管官庁への届出等を行うこと。
7. いわゆる『内部留保』については、過大なものとならないようにすること。
8. 管理費の総支出に占める割合は過大なものとならないようにし、可能な限り2分の1以下とすること。また、人件費の管理費に占める割合についても、過大なものとならないようにすること。

### 認可権限は所管官庁にあり、現実には厳しい

兵庫県教育委員会では、財団は基金が1億円以上あつて、1千万円以上の収入が確保されていて、経営が確実にできるものであることを認可の基準にしているとされていますので、1億4千万円の会社に対する個人の貸付金の基本財産への寄付と、敷地となっている個人の土地5,721㎡、地価公示価格換算時価額2,919万円を基本財産へ寄付すること。展示物は現在の取得価格で約1億円、時価で2億円以上あり、経営については、1,400万円以上の入場料もあるので継続は可能であることを明らかにしてきました。

日本公認会計士協会と財団法人公益法人協会が開催している公益法人に関する相談会に度々でかけて指導をうけており、その指導では役員の貸付金を寄付行為として寄付し、これでもって展示物や施設を購入する

という方法で設立すれば問題はないとされ、前記の文部事務次官通知に照らせば条件を満たすことができると解されますが、土地は価格が変動するので価値としては認めがたいし、質権設定がされているので認めない。会社貸付金も、展示物や施設との相殺は認めても、現金1億円はあくまで会社や個人と関係なく準備しなければならないとされるため、会社や個人に莫大な余分の経費が必要となり、対応をいろいろ検討しているところです。

次官通知では、株式取得の場合には基本財産として寄付された場合は認められる、とされているし、遺贈・贈与の場合には当該公益事業に用いることが確実なものとは認めるとされている。社債についても基本財産として保有することは許されています。皆さんの意見をお聞かせください。

京都では基金は3億円といわれながら最近認められた財団法人益富地学会館は基金6千万円で認可されており、私が理事をしている財団法人但馬地域地場産業振興センターは3千6百万円の基本金で認可されています。

#### 事業展開が難しい財団法人の融資制度を拡充してください

まだ少し先の計画ですが独立した新館を企画していますが、株式会社であれば今までの方式のとおり手軽に中小企業金融公庫・国民金融公庫や県の中小企業融資を借り入れて行うことができますが、財団法人になると借入金の道が限られたものとなり、日本開発銀行の融資と地方公共団体のかかわる『ふるさと融資』があるだけとなり、現実の借入は地方自治体の協力が得られないかぎり非常に難しい状況となります。日本開発銀行の融資枠の拡大や新しい融資制度の新設をお願い致したいものです。

#### 制度問題研究部会の議論を深めてください

次の点につきまして制度問題研究部会において「議題」として取り上げていただいたものもごさいますが、是非議論を深めていただきますようよろしくお願い致します。

#### 1.アメリカ博物館の辿ってきた歴史や先進国の歴史を社会制度として調査研究し、新しい時代の要求に応えられる博物館を育てるための提案ができるようにしてください。

アメリカでは公立よりも私立の方が多く、大きな活発な博物館のほとんどは財団法人の運営であり、これを支え、育てていく税制があることを教えられました。詳細はよくわかりませんが、自由社会の自由な発展の歩みゆく究極の姿のひとつとして、文化が重要な価値を認められて育てられていくことのできる、社会制度として、アメリカの博物館が辿って

きた発展の歴史を自由社会の社会制度の変遷の中で見ていくことはぜひ必要な大切なことであると思います。革命から始まったフランスの博物館、世界に君臨したイギリスの大英博物館など、社会が成熟していく過程の中で博物館がどのように誕生し、成長していったか、先進各国の博物館をめぐる社会制度の歴史と問題点についての研究が大切だと考えます。学会において一層調査研究が進められて、広く討議の資料として公開され、みんなでこれからの日本の博物館の育成について討議することができますよう進めていただきますことをお願いいたします。

#### 2.財団法人の実態を調べて、博物館の立場からのお願いをまとめていこう。

国では公益法人の実態及び基準の実施状況を明らかにするため、毎年度『公益法人に関する年次報告』を作成することとなりましたが、財団法人の認可については、各都道府県によって基準がまちまちのようで、詳細については非公開で、権限を持つ人の裁量にゆだねられる部分が非常に大きく、一般には、設立は税収の立場からできるだけ認めないようにしようという基本的な考え方にたっているようで、設立についての指導はしないことになっているようです。博物館の設立の過程を調査し、博物館の財団法人化と運営上の問題点や課題を明らかにしていくために、次のような調査を実施して意見をまとめていきましょう。

- ①それぞれにどんな基準で実施されているのか
- ②非公開の部分がどれくらいあるのか
- ③基本財産の内訳はどのようになっているのか
- ④運用収入の実態はどのようになっているのか
- ⑤指定寄付金は1年にいくらくらいあるのでしょうか
- ⑥営利事業の種類と収支はどうなっているか

#### 原稿募集!!

「侃々諤々」は、会員の皆さんが自由に意見を述べるためのコーナーです。奮ってご投稿下さい。

\* 字数：3,600字程度



[
書 評
]



97年2月発行  
A4判・137頁・本体価格35000円

『ミュージアム＆公共・文化会館の飲食施設活性化戦略資料集』（総合ユニコム）

山下治子

女性誌の企画には、たまに「カフェ、レストランで行くミュージアム」といった特集記事が組まれる。ミュージアムに行く楽しみは展示の鑑賞だけではなく、それを演出する飲食施設が大きなポイントであることの裏付けだろう。ところが残念なことに、各社の内容に変わりばえがしないというのも事実で、きっと編集部内でも「もっと、ほかのところないの!」「探してもないんです。建物や展示にはあんなにりっぱなのに、なんでいいカフェやレストランができないんでしょうねっ」などとやりとりされているんだろうなども勘ぐってしまう。

そんな現実に対して、ミュージアムや公共・文化会館もなんとか飲食施設を活性化させようと、変わる知恵と努力をしてくれている。その動きと流れ、考え方、またその具体的方法をデータや事例をふまえてまとめたのが本書である。

実のところ、この企画は筆者が進めてきたものであった。かつて、この出版元である総合ユニコムさんには、ミュージアム全体の運営についてまとめた『ミュージアム（テーマ館、展示館）施設化計画と事業運営資料集』（94年）、ミュージアム・グッズに絞った『ミュージアム・ショップの経営戦略・グッズ開発資料集』（95年）を出版していただいていたが、いずれもこれまでにない取り組みで時宜を得ていたと、決して安価でないながら好評を博してきた。そこで今回は第3弾として、やはりミュージアムにとって重要でありながら正面から取り組まれなかった飲食施設についてまとめてみようとなったのである。

現代芸術研究所長の平野繁臣氏の総論、栃木県総合文化会館のレストラン「オーベルジュ・デ・マロニエ」の売店にいたるフロー、鳥取県砂丘博物館（仮称）の

基本計画に盛り込まれたレストラン計画の例、さらに各地の事例、たとえば古今伝授の里フィールドミュージアムのレストラン「ももちどり」、淡路島アルファビアミュージアムの「レストランアルファビア」、丹波篠山の「特産館ささやま」、岡崎市美術博物館の「セレーノ」、江戸東京博物館の「八百膳」などが紹介されている。またわたくしは、現状のミュージアム飲食施設をいくつか分類して、ここ20年ほどの流れをざっと検討した一文を執筆させていただいた。内容はみていただいのお楽しみだが、とにかく博物館に「レストラン」と堂々と名乗りをあげたのは国立民族学博物館「レストランみんぱく」（78年）ではなかっただろうか。さらに衝撃と定着をみせたのは世田谷美術館の「ル・ジャルダン」（86年）ではなかったかと。この二つの出来事がじわりじわりと、一方でじわりじわりと一般へのミュージアム観も変えてきたのである。

まあ、そういった流れそのものは実際の料理の味にはなんの影響もないかもしれないが、ミュージアムの飲食施設は思わぬところで多くの利用者の期待するところであり、ミュージアム・マネージメントを捉えるうえで重要な脇役者（準主役くらいの場合もある）であることへの理解とその方策への助けとなるのではないだろうか。

（やました・はるこ／月刊ミュゼ）

### 原稿募集!!

ミュージアム・マネージメントを考える上で参考になるとと思われる図書・論文をご紹介下さい。ジャンルは問いません。自著でも結構です。

\* 字数：1,000字程度

## 会員からのメッセージ

### 〈個人会員・学生会員〉

#### ◆青木 正邦（富山県立山博物館）

私の勤務している立山博物館は、平成3年11月、かつて立山信仰の拠点として栄えた立山山麓の芦峯寺（あしくらじ）に開館しました。当館は、その名の通り、「立山の自然と人間の関わり」について、自然の分野と人文の分野を総合的に調査研究し、その成果を展示などで紹介するいわばテーマパークです。13haという広い地域に、野外を含め多くの施設が点在している広域分散型の博物館となっています。

これからも、創造性豊かな活動を積極的に展開しながら、教育普及活動、特に広報活動に力を入れていきたいと思っています。

#### ◆井上 敏（東京大学大学院）

この度、JMMAに入会させていただきました。現在は大学院で法的なものも含めた文化財保護の制度を研究しています。その中で、博物館というものの機能のうち、文化財保護としての機能、そして、文化財の活用としての機能について、博物館側の立場から色々なことを教えていただければと思っています。それとともに、机の上の空論ではなく、より実践的にどういうことができるかということ、常に考えつつ、この学会に参加させていただきたいと思っています。

1月には第3回の制度問題研究部会に参加させていただきました。イギリスの博物館制度と人材養成についてでありましたが、博物館というもののだけでなく、制度全体を動かす人間の養成の重要性を痛感しました。日本やイギリスにおいても、制度や社会は異なっても、結局、現実を変えていくのは「人間」なのだというこゝとも考えつつ、研究をしていきたいと思っています。これから、皆様宜しくお願ひ致します。

#### ◆井上 重義（日本玩具博物館）

日本玩具博物館は玩具や人形などの子どもの文化財を守る砦として、私が収集した5千点の日本の郷土玩具を保存公開する施設として1974年にオープンしました。

資力のない個人が運営するのですから、見せる装置や仕掛けなどのハード面より、資料充実こそが大切だと考え、全力投球してきました。毎年2千点以上を収集し、現在100カ国6万点もの膨大な資料を所蔵しています。1990年には学芸員を迎え入れ、収蔵資料をもとに年7回の企画展を開催し好評です。

国際交流も、所蔵資料の海外展や人的交流を積極的に行い、貴重な経験を重ねました。

オーソドックスな館運営を続けている当館ですが、入館者は着実に増えて年間6万人に達しました。ただ増え続ける資料と入館者で館はパンク状態です。当会に参加させていただき、今後のあるべき姿を学んでい

きたいと考えています。よろしくお願い致します。

#### ◆太田 隆（新潟県三条市在住）

〈研究部会に参加して〉

海外、特に、博物館としての歴史が長い欧米各国の博物館制度や運営の実態についての体系的な研究・情報は、これまで少なかったように思います。海外の博物館制度や博物館事情をテーマに制度問題研究部会が開催されると知り、はじめて参加しました。

講師の熱心でわかりやすい説明、活発な質疑で予定していた時間があっという間に過ぎ、有意義な一時でした。今後も、同テーマでの部会の開催を希望します。

〈研究部会の開催方法について〉

これまで研究部会は、原則として、単独で開催されてきましたが、地方の会員にとって、上京する機会は限られますので、合同部会や二日間の日程での複数部会の開催など、開催形態を工夫していただければ、大変助かります。事務局の方々の負担もあるでしょうが、ご検討をお願い致します。

#### ◆河村 憲一（名古屋港水族館）

ミュージアム・ショップは、ミュージアムの展直納の延長空間であると考えられ、グッズの開発には次のようなことが望まれる。

①子供たちにとって、教育上本当に何が必要かを配慮する

②ミュージアムの感激を日常生活の中で、どの様に生かしていいたら良いかを、コミュニケーションするもの

これらを考慮し、今後は、行政側と民間側との開発意識等の異体同心化を図り、ミュージアムショップ理念を追求し、個々のグッズのコンセプトを守り通していく「しくみづくり」がグッズ開発の重要なポイントとなるのではないかと思います。

#### ◆黒川 義文（放送大学）

生涯学習社会において、中心的役割を果たす施設としての博物館の役割は教育機関との連携等を含め大きく転換する時期にきています。その方法として、教育普及活動の充実は至急望まれており、体系化が必要と思われます。開かれた博物館に共通する教育普及活動の情報提供を希望します。普及事業の冊子やプログラム・レポート等の情報を提供いただければ幸いです。

情報提供先

〒261 千葉市美浜区真砂2-15-2-717 黒川義文まで

#### ◆佐々木 秀彦（江戸東京博物館）

コレクションとそれにとりまう学問分野につながらないマネージメント論はむなしと感じます。マネージメントの議論が抽象的な「ミュージアム」一般から歴史系、美術系、生物系などの各分野ごとに深められ、

さらに各館のコレクション・学問分野と利用者を近づけていく具体的な動きにつながっていけばと思います。

#### ◆杉垣 靖子

冬休みに埼玉県こども動物公園に行きました。動物のオッパイさがしをテーマにした「 Zooオリエンタリングマップ」を入口でもらい、それに沿ってスタンプをおしながら見ていきます。園内にはクジャクとマウ（とげを持たないヤマアラシの仲間）が放し飼いにされています。子供達も動物をいじめたり追いかけたりせずにかわいがります。コアラコーナーに「きみもコアラになろう」と子供でも登れる枝ぶりの木があり、枝を抱いてコアラ気分が味わえます。カンガルーコーナーには「母親カンガルーのお腹に入ろう」とネルでお腹の袋を作った大きなカンガルー人形があります。シマウマの柵に0m～100mの距離が表示してあり「何秒で走れるかな？シマウマは○秒チーターは○秒」とあります。ゴールにある表彰台に立って満足します。動物達はどんな食べ物を食べるのかな？弁当箱に本物の果物や木の実等を入れ展示しています。字よりも実物を見て説明された方が大人でもよく分かり印象に残ります。

動物園へは何回も行ったことがありますが、こんなに楽しく動物と親しむことができたのは初めてです。うれしくて皆様にお知らせしたくなりました。と共に、博物館もこれをヒントにして展示を工夫するとずっと魅力の増したものになるのではないのでしょうか。

#### ◆原 秀栄（国立科学博物館）

国立科学博物館に二度にわたって勤務する機会を得、管理運営に携わってきました。そしてこの間に国内の博物館のほか、欧米の博物館も視察することができました。

わが国において、博物館法というところの博物館は各種多様にわたっています。しかし、欧米に比して、博物学（博物館）というものの認識の歴史が極めて浅いため、収蔵物（標本資料）が少なく、しがたって標本資料に基づいた研究スタッフも非常に少ないのが現状です。

しかるに一方では、成熟した現代社会にあつて、人々の博物館に対する生涯学習ニーズや学校教育との連携といったように、博物館に対する国民の期待が格段に増大しています。

このような社会の実状の下でミュージアム・マネジメントを考えるキーワードとして、①標本資料に基づく研究機能、②研究成果に基づく展示機能、③これらに基づく教育普及機能の三つの機能を重視し、この三つの機能が相互に働き合う仕組み（トライアングル・システムとでも言ってみよう）を考え、深めてみたいと思っています。

しかし、この仕組みをより効果的にし、わが国の博物館全体に広げていくために、博物館法の下で国として、また地方公共団体としてどのような行政施策を実施すべきかを考えなければならないと思います。これ

からの博物館行政を考えるため、J M M Aの皆様のご意見を拝聴し、勉強させていただきたいと思っております。

#### ◆堀 成子（高岡市美術館）

「博物館の目標は教育なのか、娯楽（レクリエーション）なのか」「教育と娯楽は両立するのか」という問いに対して、イギリスの博物館専門家からは「教育」が基本、というはっきりとした意見が出てくるように思われます。

それに対して、大学進学率ではイギリスを越えた教育熱心(?)な日本で、「博物館は楽しくなければ・・・」という声が高まっています。

「教育」という言葉の面映ゆきのゆえなのか、今まで、もしかしたら重く扱われすぎてきた日本の「教育」への懐疑ゆえなのか、考えさせられるところです。

本学会で日本の博物館のマネジメントを学びたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



#### 原稿募集!!

近況報告や、ミュージアムに関するご意見、情報、PR等、会員の方々へお知らせしたいことがありましたら、お気軽にどうぞ。

\*個人会員・学生会員：200字程度  
法人会員：600字程度

## 〈法人会員〉

## ◆入間市博物館

## [博物館の紹介]

名称 入間市博物館 A L I T (アリット)  
 館長 遠山 眞平  
 所在地 埼玉県入間市二本木100  
 (〒358)  
 電話 0429-34-7711  
 FAX 0429-34-7716



当館は平成6年11月にオープンした、「茶」をメインテーマとする多機能型の博物館です。

A L I Tとは、当館の特徴を示す5つの機能を意味しています。AはArt(美術館的機能)とArchives(文書館的機能)です。美術館的機能とは、当館の特別展示室をギャラリーとして貸し出し、市民の創作活動の発表の場として利用されています。文書館的機能とは、館蔵の文書資料を検索閲覧できるシステムです。LはLibrary(図書館的機能)です。図書資料に加え、ハイビジョンや400本のビデオを視聴できるシステムです。IはInformation(情報提供機能)です。現在は館蔵資料に関するデータをRANで検索できるサービスを行っていますが、将来は博物館と家庭をインターネット等で結ぶ、地域の情報発信基地としての機能を充実したいと考えています。TはTea(茶)です。入間市は狭山茶の主産地ですが、この地域性を生かし、茶に関するさまざまなイベントや情報提供を行っています。

しかし、当館の立地条件は、必ずしも恵まれたものではありません。一人でも多くの人に来館していただくためには、当館独自の活動に加え、市全体の観光行政とタイアップしていく必要があります。平成8年度には観光協会が設立され、市の循環バスも当館を発着場とすることになりました。今後は来館者へのサービスを含め、システムチックな運営(ミュージアム・マネージメント)を検討する時期だと思われます。

問い合わせ先：教育普及係学芸員 今井正美

## INFORMATION

## ●新しい研究部会ができます

第2回大会では、これまでの5つの研究部会に加えて「教育・コミュニケーション研究部会」と「ミュージアムショップ研究部会」が設けられます。今後の活動をご期待下さい。

## ●会員募集

第2回大会にあわせて会員名簿が更新されました。平成9年2月現在で、375件の会員登録がありますが、学会活動の充実のためにも一人でも多くの方々に会員になっていただきたく、いろいろな機会を利用して積極的に当学会をご紹介下さいますようお願い申し上げます。入会案内書類も新しくなる予定ですので、必要の方は事務局までお問い合わせ下さい。

## ●原稿募集

本誌は、会員の皆様がつくる会報です。個性的かつ独創的な原稿をお寄せ下さい。

## 編集後記

春一番も吹きぬけて、花もほころぶ季節が到来しました。多くの方がこれまで慣れ親しんだ職場や学校を去り、新しい未来にはばたく季節が到来したようです。このような別れと出会いは毎年繰り返されるドラマではありますが、「過去をどう決別し、それをうまく継承しながら未来をつくりだしていくか」ということは、ミュージアム・マネージメントの大きなテーマになると思います。

新しい時代は宿命的にそして決定的に訪れるものではありません。それは自分自身でつくりだしていくものです。かび臭くなってしまった過去にいつまでもとらわれていても、また流れのままにまかせていても、それからは、何もつくりだすことはできません。

今回の大会は、「新しい時代とミュージアムの可能性」というテーマで開催されます。会員の皆様は、過去をどう継承し、ミュージアム自身が未来をつくりだしていくという視点から、新たな発見をしていただければと考えております。

副会長、編集担当理事：江ノ島水族館長 堀 由紀子

## JMMA会報 No.4 (vol.1 no.4)

発行日/1997年3月8日

発行/日本ミュージアム・マネージメント学会

事務局 国立科学博物館教育部企画課

〒110 東京都台東区上野公園7-20

TEL 03-5814-9876 FAX 03-5814-9898

デザイン・印刷・製本/(株)ミユゼ